

終末期看護への学習意欲を高める要因の検討

－卒業前の看護学生への調査から－

小濱 優子¹⁾ 滝島 紀子¹⁾ 武内 和子¹⁾

要 旨

本研究では、看護基礎教育3年課程3年次の「看護の統合科目」において、テーマに「終末期看護」を希望した学生を対象に、卒業前にアンケート調査（12名）および面接調査（5名）を実施し、終末期看護に関心をもったきっかけを明らかにし、学習意欲を高める要因について検討した。アンケートから、【終末期看護への興味関心】、【講義からの学び】、【映画視聴や闘病記の影響】、【実習の看護体験】、【親族や家族の死】が、インタビューからは、＜学生自身の家族の闘病や死の体験＞、＜実習で他の学生から聞いた終末期患者の看護＞、＜講義を通して得た緩和ケアに関する様々な学び＞、＜実習で体験した終末期・老年期患者の看護＞などの動機が明らかとなった。このような動機は、学習意欲を高める内部的要因として強化され、学生がさらに終末期看護や緩和ケアの学びを深めていく目標を掲げることに繋がり、学習行動へと結び付いたものと考えられる。

キーワード：看護学生、終末期看護、緩和ケア、動機、学習意欲

I はじめに

2006年（平成18年）、がん対策基本法¹⁾が成立し、そのなかで「緩和ケア等がん患者の療養生活の質の向上」が義務付けられ、緩和を目的とする医療が早期から適切に行われるようにするよう明記された。がん（悪性新生物）は、1981年以降、死因の第1位を占め²⁾、2人に1人が罹る病と云われており、「緩和ケア」への社会的ニーズはさらに高まっていくものと思われる。それ故、緩和ケアの実践と教育が重要視され、地域における緩和ケアの提供体制の整備が急務となっている³⁾。また、2007年（平成19年）、看護基礎教育の充実に関する検討会報告書⁴⁾に「終末期看護に関する内容」が追加され、2009年（平成21年）、看護師養成課程の教育課程改正の趣旨のなかに緩和ケアに関する内容が反映され、緩和ケア教育の重要性が指摘された。翌年、2010年（平成22年）版の看護師国家試験出題基準⁵⁾には、「緩和ケア」に関する項目が挙げられ、看護基礎教育における「緩和ケア」に関する教育の重要性が高まっていた。

緩和ケアに関する臨床研究では、がん患者とその家族や看護師対象の研究^{6) 7) 8)}などが散見される。看護基礎教育分野において、看護学生と緩和ケアをキーワードに医中誌を検索すると84件の論文（原著26）が表示され、講義や実習後の学生の学びを分析した研究が多くみられる。また、看護学生とターミナルケアでは409件（原著173）と多く、研究課題としての関心の高さが窺える（平成25年12月6日現在）。

本研究では、緩和ケアの概念のなかの「終末期看護」に着目し、「看護の統合科目」において「終末期看護」を選択した学生に焦点を当て、「終末期看護」に関心をもつ動機は何か調査し、そこから学習意欲を高める要因について検討したいと考えた。

II 研究目的

看護基礎教育3年課程3年次の「看護の統合科目」において、テーマに「終末期看護」を希望した学生に焦点を当て、卒業前にアンケートおよび面接調査を実施し、終末期看護に関心をもつ動機を明らかにし、学習意欲を高める要因を検討することを目的とした。

1) 川崎市立看護短期大学

Ⅲ 用語の定義

「緩和ケア」とは、世界保健機構（WHO）が『生命を脅かす病に関連する問題に直面している患者と家族の痛み、その他の身体的、心理社会的、スピリチュアルな問題を早期に同定し、適切に評価と対応することを通して、苦痛を予防したり、緩和したりすることにより、患者と家族のQOLを改善する取り組みである』と定義している⁹⁾ (2002)。緩和ケアの要件の一つに、「治療期間を含め早期から実践する」という記載があり、これは終末期看護などのように期間に限定されるケアではなく、その状況に応じて行われる程度が異なることを示している¹⁰⁾。緩和ケアとは、診断の初期段階のケアから終末期看護、遺族のケアまでも含む広い概念である¹¹⁾。

「終末期看護」は、「ターミナルケア」ともいわれ、「現代医療において可能な集学的治療の効果が期待できず、積極的な治療がむしろ患者にとって不適切と考えられる状態で、生命予後が6ヶ月以内と考えられる段階」¹²⁾と定義されている。

Ⅳ 研究方法

1. 対象：Y看護短期大学3年課程3年生75名のうち、「看護の統合科目」において、「終末期看護」を第一希望とした学生15名のうち、同意を得た12名（男子1、女子11）にアンケート調査を実施した。そのうち面接の同意を得られた5名（女子）を対象に半構造的面接調査を実施した。今回、「終末期看護」を第一希望とした学生は、「終末期看護」への学習意欲が高い集団と位置づけ、対象を選択した。
2. データ収集期間：平成24年2～3月。
3. データ収集方法：アンケートは、①終末期看護に関心をもった理由、②終末期看護に関心をもつきっかけとなった講義と内容、③終末期看護に関心をもつきっかけとなった実習と内容、について実施した。面接の同意を得られた対象者に、アンケート内容をもとに、①～③についてインタビューによる半構造的面接調査を実施した。本研究では、関心をもつ動機となったものを「きっかけ」として表現した。
4. データ分析方法：アンケートによるデータはEXCELソフトを用いて入力し、意味ある文章毎にその内容をまとめた。アンケート結果は看護教育者2名によって内容を繰り返し読み議論を重ねて

分析した。面接調査によるデータは、インタビューガイドの項目に沿って同一の面接者が対象者5名（A～E）に実施し、会話データを録音・保存した。データを逐語録に整理し、その中から質問に関する回答を表にまとめた。

5. 倫理的配慮：アンケート調査、インタビューのいずれにおいても、対象者に説明書を用いて研究趣旨を説明し、個人情報の保護および中途辞退の保証、データを研究以外の目的で使用しないこと、成績評価に影響しないことを伝え、同意書にて同意を確認できた学生を対象とした。なお、本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

Ⅴ 結果および考察

アンケート調査の結果から、「終末期看護」に関心をもった理由について表1に示した。講義や実習に関する記述も含めて分析した結果、「終末期看護」に関心をもつきっかけとなったこととして、【終末期看護への興味関心】、【講義からの学び】、【映画視聴や闘病記の影響】、【実習の看護体験】、【親族や家族の死】の5点にまとめられた¹³⁾。

インタビューの結果は表2～4に示した。インタビューの結果から、終末期看護に関心をもつきっかけになったこととして、＜学生自身の家族の闘病や死の体験＞、＜実習で他の学生から聞いた終末期患者の看護＞、＜講義を通して得た終末期看護・緩和ケアに関する様々な学び＞、＜実習で体験した終末期・老年期患者の看護＞の4点にまとめられた。

今回の調査から、学生が終末期看護に関心をもつきっかけとなった出来事や講義・実習の学習内容が明らかになった。アンケート結果と面接調査から、終末期看護への学習意欲を高めた要因について検討したい。

アンケート結果から、学生が終末期看護に関心をもった理由（表1）をみると、「終末期にある人はいかに自分の病気と向き合い生活しているのかわからなかった」、「終末期の患者との関わり方を学ばなかった」、「命の終わりにとても興味があつたから」等、対象者全員が【終末期看護への興味関心】を強くもっていたことがわかる。なかには、「人として一番大事なことを学べる」、「終末期看護が一番基礎にあると思った」という記述もあり、人の命に向

き合い関わろうとする学生の意思の強さが読み取れた。また、【親族や家族の死】の体験や、本を読み関心が高まったという学生が見受けられ、家族背景や過去の自己学習からの影響も窺えた。

【講義からの学び】では、「終末期にある人の看護」（緩和ケアを含む）の科目に関する記述が、「緩和ケアの授業と実習の出来事がリンクして自分の死生観や全人的ケアについて考えさせられた」、「実体験に基づくお話やホスピスでの看護の様子」、「緩和ケア病棟、キューブラ・ロス、グリーフケア」、「全体的に緩和ケアの授業で影響された」等、最も多く記述されており、終末期看護・緩和ケアを中心に学習するこの科目による影響の大きさが窺えた。また、「映画を見たこと」、「闘病記はリアリティーがあって印象に残っている」等、【映画視聴や闘病記の影響】も大きい。闘病記の授業では、患者や家族の生の声が綴られた本を教材として用い、グループ討議を行うことによって患者理解が深まり、終末期看護・緩

和ケアへの関心が高まったものと思われる。

【実習の看護体験】では、1・2年次の実習でがん患者や終末期の患者を受け持った体験から、「90歳代の胃癌末期患者を受け持ち…（略）、終末期における緩和ケアはこんなにも安楽な環境を提供することができるものと初めて実感できた。」や「70歳代の直腸がん末期患者を受け持ち、終末期看護について多くのことを学んだ。」等の記述のように、実習体験を通して、終末期看護・緩和ケアについて学び、「死」について考える貴重な学びの機会となっていたことが窺えた。

次に、面接で5名の学生がインタビューで語った終末期看護への動機づけとなった具体的な出来事（表2）をみると、学生A、B、D、Eの4名は、＜学生自身の家族の闘病や死の体験＞について具体的に語っていた。それが患者の家族の立場を経験して、終末期看護への強い関心へと結びついていったことがわかった。学生Cは、＜実習で他の学生から

表1 終末期看護に関心をもった理由

| カテゴリ | 内 容 |
|-------------|---|
| 終末期看護への興味関心 | <p>終末期看護に興味があった。</p> <p>自分の意識改革につながる、人として一番大事なことを学べと思った。</p> <p>終末期看護が一番基礎にあると思った。</p> <p>もう一度自分に何ができるのか考える機会がほしかった。</p> <p>終末期こそその人の人生に寄り添うという意味を実感でき今後につながると思った。</p> <p>終末期にある人はどのような心理プロセスを経て過ごしているのか知りたかった。</p> <p>終末期にある人はどのように自分の病気と向き合い生活しているのか知りたかった。</p> <p>終末期の患者をもつ家族がどのように患者と関わっているのか知りたかった。</p> <p>終末期の患者との関わり方を学びたかった。</p> <p>死とはどういうものか、死を実感したとき患者はどう思うか、看護師の関わりについて学びたい。</p> <p>死期が迫っている患者はどのような気持ちでどのように受容していくのか知りたい。</p> <p>看護師として人生の最期にどのような気持ちで看護を行い何を大切にしているのか知りたい。</p> <p>人の命に興味があったので命の終わりにとても興味があったから。</p> <p>患者が人生の最期までその人らしくいられる看護も大切と思い学びたいと思った。</p> <p>がん患者と家族を看護しなければならない。家族看護とともに終末期看護を勉強したい。</p> |
| 実習体験 | <p>2年次の成人看護学実習で終末期患者を受け持ち多くのことを学んだから。</p> <p>実習で様々な患者と出会いやがて訪れる死をどのように受け止めているか気になったため。</p> <p>2年次の成人看護学実習で苦痛が強く死にたいと訴えた80代の心不全男性を受け持ったことがきっかけ。</p> |
| 親族や家族の死 | <p>身内のターミナルを経験して看護師の立場でできることは幅広くあることを再認識した。</p> <p>祖父が亡くなり人はいつか死ぬと身に染みてわかったから。</p> <p>2年生のときに叔父を白血病で亡くし自分だったらもう少し良い看護ができるのではと思ったから。</p> <p>親族でがんで亡くなった人がおり今後もがんで亡くなる人が増えると思ったから。</p> |
| 本を読んで | <p>「死は人生の最高点の瞬間である」と本で読み終末期患者とその家族に対する看護を知りたいと思った。</p> <p>元々ターミナル看護の魅力と必要性を書籍で読んでいたから。</p> |
| その他 | <p>自分がナースとして働くようになったとき自分の死生観も必要になると考えたから。</p> |

聞いた終末期患者の看護＞の体験が動機となったと答えており、学生Aも「同じグループの学生の終末期看護の学びを共有した体験」について語った。このことは、実習グループメンバー間で学びを共有することで、次の学習への動機づけとなり学びが発展

したことを示している。また、学生から＜講義を通して得た緩和ケアに関する様々な学び＞（表3）も語られ、学生が全人的アプローチやQOLへの援助という緩和ケアの重要な関わりについて学び、＜実習で体験した終末期・老年期患者の看護＞（表4）

表2 終末期看護に関心をもつきっかけとなった出来事

| 学生 | きっかけとなった出来事 |
|----|---|
| A | <p>【祖父（母方）の死】 【祖父の苦痛への関心】 その時、祖父はどんな苦しみ方をしたのか、すごく興味を持った。 【実習で家族看護やメンタルケアへ強い関心】 もともと実習で、家族看護やその患者のメンタルケアにすごく興味を持っていた。 【家族としての気持ち】 自分の家族が死んで、その時のおばの気持ちはどうなのか、ずっと介護していたおばの気持ちはどうなのか、娘である母の気持ちはどうなのかと思った。自分の親戚、自分の身に起きるとやっぱり感じ方は変わってしまうのか？とすごく思った。きっと冷静でもいられないし、患者に思うような気持ちで祖母とか祖父とか、亡くなる親戚とかみれない。</p> |
| B | <p>【祖母の突然の末期がん発覚とその死】 2年次の前期の実習と、後期の実習の間に祖母が亡くなった。癌という病気に関わることが多くなり、「なぜこのタイミングで」と思ったが、祖母の病に気づいた時には末期癌で、余命が短かった。 【実習体験から終末期看護へ一層の関心】 本当に終末期に興味をより一層持った。2年生の時は人の死について深く考える機会が多かった。</p> |
| C | <p>【実習でがん末期患者の看護について学びを共有】 実習でグループメンバーの受け持ち患者が癌末期の方だったので、一緒に考えて、そういう看護は大事だと実感した。</p> |
| D | <p>【終末期にある母の介護体験】 病院で看護師に支えてもらった。母親が終末期を経験して、病院から、「もう在宅に行こう」と言われた時に、私が看護学生だということを、知ってくれて、学生のレベルでも分かるように、パンフレットなどで分かる範囲の専門用語は使ってくれた。 【自分の家族と類似した病気経過を辿る患者への思いの変化】 自分の家族がかかった病気と似たような経過を辿っている患者を受け持ったりすると、より家族がどう思っているのか気になるが、逆に整形などあまり関係ない診療科の実習になると、そこは気持ちが十分に分からない。診療科によって思い入れが変わるというのはある。</p> |
| E | <p>【祖父のがん治療経過や終末期の闘病の様子を聞いて】 東北の震災の前日に亡くなった祖父のがんの治療経過や終末期の闘病の様子を親から聞いた。結構、進行していたが、それでも、お見舞いに行くたびに検査値の紙を見せてきて、「ほら、見てみろ。この数値がどうだった」みたいな事を言ったり、後、亡くなる前、意識がなかったが、一時的に意識が戻った。普通にみんなとも話せる様になった。本人は末期だと知らなかったらしい。普段見ない様な親戚が多数いたみたい。親が曰く、自分では感じ取っていたんじゃないかと。親から聞いて、頑固で強気の人だが、そういう事を考えていたのかと思った。看護統合科目では終末期の心理プロセス、その時どう思っていたのか、をテーマに希望した。</p> |

に生かし、学びをさらに発展させたことがわかった。

以上のように、学生の背景として、学生自身の家族の闘病や死の体験、そして講義からの学び、実習の様々な経験を通して、「終末期看護」への関心を高めさらなる学びの発展が明らかとなった。

園田¹⁴⁾ らが行った看護学生への緩和ケアの授業後の縦断的な調査(2012)によると、緩和ケアに関

連する講義・実習の影響が大きく、学生の死へのイメージが肯定的に推移し、人生における目的意識が高くなったという。今回の調査においても、前述したように講義・実習が大きく学生の学びに影響していたことが窺えた。

今回、調査対象の看護学生は、20～30代の成人期の学習者である。Knowles,M.S.は、成人教育論

表3 終末期看護に関心をもつきっかけとなった講義と学び

| 学生 | 講義 | 学んだこと | その講義から発展した学び |
|----|---|---|--|
| A | 1年次後期 終末期にある 人の看護（緩和 ケア含む） | ・アニメーション映画が衝撃だった。 ・死は悲しいものだが亡くなった人が上から見守り残された人は頑張ろうと思う。今でも忘れられない。 ・命は限られていることを感じた。 ・興味を持って学ぶことができた。 ・これを支えられる看護者になろうと思った。 | ・基礎となるケアだと思う。 ・メンタルケア、スピリチュアルケアも大切。 ・このまま授業で習ったことはいつでも基盤となる。 ・QOLへの援助があり、終末期以外も含め、全ての患者に必要なことという意味でつながっている。 |
| B | 1年次後期 終末期にある 人の看護（緩和 ケア含む） | ・2年生の後期実習でがん性疼痛が強い患者を受け持ちした。本当に何をすればよいか、全くわからない状態だったが、授業で学んだタッチングの方法や疼痛緩和の援助方法が役に立ち、患者を安心させるような看護ができた。 | ・2年生の実習で不安の強い患者の傍にいる看護を実践し、そこでの学びを3年生の実習にもつなげて実践できた、という体験をした。その時に指導していた教員から「2年生の実習があったからたぶん傍にずっといられたのだろう」と言われすごく嬉しかった。「傍にいる」という看護を看護学生として、体験的に学ぶことができた。 |
| C | 1年次後期 終末期にある 人の看護（緩和 ケア含む） | ・人との関わりや医療機械を扱うだけではないと改めて学ぶことができた。看護のすごく大事な部分を学ぶことができた。 ・その人らしくという考えを学んだ。 ・トータルペインを捉えるというところに自分の看護観を見い出せたような気がしたのでもっと学びたいと思った。 | ・全部の科目に繋がっていたと思う。特に看護系の看護方法とか、今まで身体的な面と心理的な面を離して考えていたが、この授業を受けたことで、トータルペインというものがあることがわかった。実習の時に、患者さんは苦しいから痛みに関心していると、痛みから精神的に落ち込んでいる、とトータルペインを思い出しながら実習することができたと思う。苦痛をトータルに捉えることを意識できた。 |
| D | 1年次後期 終末期にある 人の看護（緩和 ケア含む） 在宅看護 | ・全人的なアプローチが大事ということ。 | ・2年生の実習で終末期の患者を受け持ちした。授業の資料をよく見て思い出した。成人の科目では「痛みには様々な要因があること」、在宅の科目では「家族も看護の対象であること」。家族が感じる悲嘆のプロセスをテーマにして、まとめができた。 |
| E | 1年次後期 終末期にある 人の看護（緩和 ケア含む） 老年看護 | ・成人看護学では、終末期看護について幅広く学んだ。 ・老年では高齢者のQOLの重要性を学んだ。 | ・老年看護の実習で痛みのある終末期の患者を受け持ちした。痛みとどう付き合っていくか、どう忘れるか、痛みがあるなかで患者の生きがいを見出すか、などを考え、講義で学習したことを生かしながら実習できたのではないかなと思う。 ・教科書で学んだことはさっとしか入ってこなかったが、在宅の実習で家族への関わりが大事だと学んだ。家族は病気のプロセスを通して、葛藤しながら受け入れていく。家族に合った声掛けをちゃんとしないといけないと思った。 ・どんどん実習に繋がったことがわかった。 |

表4 終末期看護に関心をもつきっかけとなった実習と学び

| 学生 | 実習 | 学んだこと | その実習から発展した学び |
|----|--------------------------------------|---|--|
| A | 1 年次後期 基礎看護実習 2 年次後期 成人看護実習 | <ul style="list-style-type: none"> ・1年生の基礎看護実習の時に同じグループに癌患者を受け持っている学生がいた。カンファレンスの話や、その患者に挨拶した時の様子を見た時に、今日は痛かったから足浴をやる予定だったが中止にした、と学生が説明するのを聞くと「本当に辛いんだ」と思った。 ・成人看護実習の時も終末期の患者を受け持ちしている学生がいて、私の患者と同室で、向いのベッドだったので、よく挨拶していたが、どこかぼーっとしている様子が多いと感じ、死が近いかなと少し感じ意識をしていた。同じグループの学生から終末期看護について学ぶことができた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・学んだことから看護統合科目のテーマを選ぶ気持ちや、そのまま発展していった。自分もいろいろな経験をして、祖父の死も間にあったので。 ・1年後期の「終末期にある人の看護」の授業から繋がって、終末期看護に興味を持ち、動機となった。 |
| B | 2 年次前期・後期 成人看護実習(2) | <ul style="list-style-type: none"> ・患者は自分の死が近いことを感じ取っていると思うが、そういう中で、私は学生として誰にケアの援助をしてもらえばいいのか、看護師なのかどうか、と悩んでいた。 ・患者から病室で「ここに居てほしい」と言ってもらえると、すごく嬉しかった。傍に居て、と言われることはこんなに嬉しいことなんだと思った。 ・学生の身なので、鎮痛薬を入れるとかそういうことは出来ないが、学生ならではのケアが出来て、家族と一緒に清拭させて頂いたりとか、衣服の着脱とか一緒にさせて頂いたので、家族と関われたこともすごく良かった。家族の心境を目の当たりにして学ぶことが出来た。家族への看護者の関わりで変わってくることを意識できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・学んだことから老年看護の実習に発展していったと思う。老年の実習で不安が強い患者みて2年生の実習の時のように傍に居ることができた。実習の体験が活かされている、と教員からコメントを頂いた。 ・就職先を決めるときは、知らず知らずのうちに、急性期をなるべく避けて、慢性期や癌の緩和ケアなどに力を入れている病院を選ぶようにしていた。 ・だから、3年生で終末期看護をテーマに選んだ。 |
| C | 1 年次後期 基礎看護実習 | <ul style="list-style-type: none"> ・年齢に関係なく、人には死というものがある、誰にでも起こり得ることを実習で認識できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ちょうど実習の時期ぐらいに、友達の母が亡くなった。友達は私と同年で、その親もうちの親と同年ぐらいだったので、そういう年なんだと思った。幼い頃、親は絶対にいつも傍に居る、というイメージがあったが、人はいつかは死ぬ、この時期にちょうど影響を受けたことが大きかった。 ・3年生になってから、死生観をきちんと持っていることが大事なのかなと、ある程度、死をきちんと考えておかないと、もしそういう状況が自分の周りで起きてしまったら、自分で対応できなくなるかな、といういろいろ考えるきっかけになった。 |
| D | 2 年次前期 成人看護実習 | <ul style="list-style-type: none"> ・一番困ったのは、看護実践の評価の仕方。終末期患者の QOL をどう考えたらいいか。(意識レベルの低い) 患者の意思が分かる表情、ちよとしたその反応などの評価に苦労した。 | <ul style="list-style-type: none"> ・思い出に残っている実習であり、印象が強い。 ・一生懸命関わっていたし、この人らしく過ごすことってどういうことだろうと考えた。 |
| E | 2 年次前期 成人看護実習 | <ul style="list-style-type: none"> ・患者から「あなたが居てくれたから頑張れた、ありがとう」と言われて、終末期患者ではないが寄り添う看護、患者の気持ちを汲み取ることを学ぶことができた。看護師にとって一番必要なことと私は思う。自分の看護観も結構それに近いので。 ・身体面だけでなく、精神的ケアなど全人的にみるのが大事と学んだ。 | <ul style="list-style-type: none"> ・そこで学んだことが自分の看護観に繋がったというはある。就職の面接時に看護観を提出が必要な病院を受けた。その時に自分の看護観って何なんだろうって、過去の実習のエピソードと括りつけて看護観を書いた。自分の実習で一番心に残っているのはと考え、「この言葉が心に残っているということは?」という風に逆算して考えていった時に自分の看護観を改めて実感させられた。その後、後期に老年とか在宅の実習を行ったが、そう考えながら実習している自分がいた。患者によく聞きすぎて振り回されていると云われる。働いてから業務的に忙しくなってもこれだけは忘れないようにしたいということはある。 |

(andragogy) のなかで、成人学習者の「学習への動機づけ」について、「成人の学習への動機づけは、外的なものも多いが、より重要な動機づけの要因は内面的なものである。したがって、成人学習者の援助者は、潜在的な動機の側面にも十分注目する必要がある」¹⁵⁾と述べている。今回、学生が終末期ケアや緩和ケアに関心をもった動機の一つとして、学生自身の家族の闘病や死の体験という、極めて個人的な体験が根底にあることがわかった。学生自身の家族の闘病や死へのさまざまな思いが内面化され、潜在的な動機となって、緩和ケアや終末期看護を学びたい関心が高まり、学習の意欲向上へと繋がったと考える。学生の過去の家族の病や死という経験から生じた潜在的な動機に加えて、看護学生として講義や実習体験を通して得た学びを重ねていくことで、さらに確かな動機となったものと考ええる。

下山は、心理学の概念から「学習意欲は動機づけ(motivation)の概念に相当し、それは行動を引き起こす原動力となる欲求・動機という内部的要因と行動を方向づける目標・誘因という要因、および両者の間に生じる行動の三者の関連を含んだ概念」¹⁶⁾であると述べている。前述したような学生の終末期に関心をもった様々なきっかけが、動機づけとなり内部的要因として強化され、学生が終末期ケアや緩和ケアの学びを深めたいという目標を掲げ、テーマの選択(行動)に結び付いたものと考えられる。

糸島¹⁷⁾は、終末期看護実習で何もできないという無力感をもっていた学生が、自分自身と向き合うことで、学生の関心が患者や家族の苦しみに移行し、学生の学びに繋がったと報告している。学生の終末期患者の看護実習体験によるインパクトは大きく、その体験の影響は大きい。患者の苦痛を何とかしたいと苦悩し、時には自分の思いに押し潰されそうになることもある。今回、対象の学生Bは、2年生の実習体験から得た学びを3年生の実習で生かすことができ、緩和ケアに力を入れている病院を探すなど就職活動にも影響していた(表4)。その学びは学生の看護観を育み、職業的アイデンティティやキャリア形成にも影響するものと推察された。

本研究で得られた結果すべてが、学生の「終末期看護」への動機づけとなっており、その中でも学習意欲を高めた大きな要因が“学生の家族の闘病や死の体験”であることに気づかされた。個人情報の問題から、講義や実習の前に学生の個人的体験を確認

することはできないが、終末期看護や緩和ケアの教育に携わる者は、常に受講者に対して様々な背景が潜んでいることを念頭に置き、教育に関わる必要があると考える。

Ⅵ 結論

今回、看護基礎教育3年課程の卒業前に、「看護統合科目」で「終末期看護」をテーマとして希望した学生に焦点を当て、「終末期看護」に関心をもったきっかけ(動機)について調査した結果から、終末期看護への意欲を高める要因について次のような結論が得られた。

「終末期看護」に関心をもつ動機となったものとして、アンケートからは【終末期看護への興味関心】、【講義からの学び】、【映画視聴や闘病記の影響】、【実習の看護体験】、【親族や家族の死】が、インタビューからは<学生自身の家族の闘病や死の体験>、<実習で他の学生から聞いた終末期患者の看護>、<講義を通して得た終末期看護・緩和ケアに関する様々な学び>、<実習で体験した終末期・老年期患者の看護>が明らかとなった。講義・実習からの学び、また学生自身の家族の闘病や死の体験からの影響が大きいことが分かった。

以上のような動機は、学習意欲を高める内部的要因として強化され、学生がさらに終末期看護や緩和ケアの学びを深めていく目標を掲げることに繋がりを、学習行動へと結び付いたものと考ええる。

Ⅶ 研究の限界

本研究では、看護基礎教育機関の卒業年次学生の一部を対象として行った調査であるため、卒業年次の学生全体の特徴を表すものではない。同一学年全員の状態を把握し、検討する必要がある。

おわりに

今回、学生の終末期看護の学習意欲を促すきっかけとなった様々な事実を手がかりとして、さらに緩和ケア教育を充実させていきたいと思う。

なお、本研究の一部は、平成25年度日本看護研究学会において発表した内容である。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 一般財団法人 厚生労働統計協会編. 国民衛生の動向・厚生指標増刊. Vol.58, No. 9, 2012, p 157 - 159.
- 2) 同掲書 1). p .52 - 57.
- 3) 恒藤暁・内布敦子監修. 系統看護学講座別巻. 緩和ケア. 医学書院, 2011, 11 p.
- 4) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 2007 (平成 19 年 4 月).
- 5) 医学書院看護出版部編. 保健師・助産師・看護師国家試験出題基準. 平成 22 年版. 医学書院, 2009, 3 - 70 p.
- 6) 松岡由佳他. 円滑な麻薬導入に向けたパンフレットの使用と目標設定をとり入れた癌性疼痛緩和への援助. 日本看護学会論文集 (成人看護Ⅱ) 38, 2007, p .157 - 159.
- 7) 福井小紀子. がん患者の家族の情報ニーズおよび情報伝達に関する認識とその関連要因 - 初期と末期の比較 -. 日本看護科学学会誌. Vol.22, No. 3, 2002, p . 1 - 9.
- 8) 砂川洋子・照屋紀子. 総合病院に勤務する看護師の緩和ケアに関する意識及び学習ニーズの検討 - 看護経験年数による比較 -. 日本看護研究学会雑誌. Vol.32, No. 3, 2009, p .355.
- 9) 大学病院の緩和ケアを考える会編. 臨床緩和ケア. 青海社, 2009, 1 p.
- 10) 前掲書 3). 5 p.
- 11) 前掲書 9). 2 p.
- 12) 柏木哲夫監修・淀川キリスト教病院ホスピス編. 緩和ケアマニュアル・ターミナルケアマニュアル改訂第 4 版. 最新医学社, 2001, 19 p.
- 13) 小濱優子他. 看護学生の緩和ケアへの学習意欲に影響を及ぼす要因の分析. 日本看護研究学会学術集会. 第 39 回, 2013, p .238.
- 14) 園田麻利子・上原充世. 看護学生の「生と死」に対する考え方の推移. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要. 16, 2012, p .13 - 21.
- 15) 麻生誠・堀薫夫. 生涯発達と生涯学習. (財)放送大学教育振興会, 2001, 81 p.
- 16) 下山剛編. 学習意欲の見方・導き方. 教育出版, 2000, 2 - 3 p.
- 17) 糸島陽子・古屋佳子. 終末期看護実習での学生の葛藤 - 何もできない無力感から終末期看護の学びを得るまで -. 日本看護科学学会学術集会誌 26 回, 2010, p .331.